

菅家 英朗氏



「親水」という言葉をGoogleで画像検索しますと、ほぼ川の画像ばかりなのですが、自然というよりはどちらかというと庭園的な、川があって人の手が入って石積みがあって池があったり船が浮かんでいたり…と、水と遊ぶ都市の中での空間というイメージです。

では、「親水+港湾」と入れるとどうなるかという、だいぶ硬くなります。構造物というか防波堤などがたくさん出てくるのですが、よく見ていくとさっきの話は水辺に柵がないんです。でもこちらの写真 **1** はほぼ水辺に柵ばかりなんですね。これは場の特性というか、そこを管理する人たちの思想というか法律の枠というか、そういうものがあってどうしてもこうせざるを得ない。

何かあった時に管理責任を問われる人にしてみれば、これが無いと落ちた責任を取らされるから、これを乗り越えて落ちた人はその人の責任、という言い訳なんですね。これはもう仕様が無い。

そして検索ワードを「港」に変えてみると、船が浮いてて棧橋があって、釣り人も写っていたり漁船があったりと、少し柔らかくなります。人と海とのふれあいたい目線が加わってきたかなと。でも「港湾」と入れると途端に硬くなって、コンテナターミナルがたくさん写っています。 **2**



これは言葉の遊びなんですけど、港とひとくちに言っても水産庁が管理する港と、公安庁が管理する港があって、港湾は基本港湾局が管理してますから、こういう物流の写真が多くなるんです。元々港は物流の拠点の意味合いですので、日本の場合99.7%が船で輸出入されていますから、海に囲まれた日本では、港が無いと経済も国民生活も成り立たないんです。ですからこれは必要なもの。しかしそこに人が入れない「ソーラス条約」というものがありまして、9.11の同時多発テロがあって以来、港の中には人が勝手に入っちゃいけないエリアというのが明確に出来てしまいました。これまでも立入禁止でしたが、暗黙の了解で釣り人が入って釣りを楽しむ分にはそんなに厳しくなかったのに、今後はダメだという事になったんです。

一方「海辺」と入れると、途端にトロピカルになるんですね。多分親水の究極ってというのは自然であって、そこで人が海と遊ぶとか休むとかいう写真が多いのですが、これだけの数の人が生活していく為には、港も必要だしああいふ場になってしまうのは仕方ない。その中でどうやって親水空間を整備していきましょうかという話で、サンフランシスコの例ですけど、フィッシャーマンズワーフの中でも世界で最も成功していた事例がこのピア39です。 **3**

アメリカの港と言うのは日本と違って棧橋が出ていて、そこに船を着ける構造になっていますが、そのうちの一つがこういうマリーナプラス商業施設のような場所として解放されています。

シンポジウム編集後記

加藤鮎子衆議院議員・国土交通省東北地方整備局酒田港湾事務所清水所長・海上保安庁酒田海上保安部鈴木保安部長・山形県港湾事務所井上所長・酒田市商工港湾課の皆様・海づくり研究会木村事務局長・みなと総合研究財団管家主任研究員・心のふるさと新井田川の会原田会長・酒田海洋少年団高橋後援会長・酒田みなとまちづくり市民会議加藤理事…酒田の親水空間に関係する皆様が一堂に会することができたことが、このシンポジウムの本当の成果と感じた。一大沼みずほ参議院議員も出席される予定だったがインフルエンザに罹りやむなく欠席されたー

酒田港は、藤原秀衡の妹とも後室とも言われる徳尼公（とくにこう）が酒田に落ち延びた際に随伴した家臣 36 人により開かれたと言われる。その時の家臣が「酒田三十六人衆」と呼ばれ、その子孫は、後に酒田を代表する大商人になった。

万治 2 年（1659 年）に出羽国村山郡の幕領米の輸送を請け負った江戸の商人正木半左衛門らにより西廻り航路が開かれ、酒田港は西廻り航路の起点となった。最上川の舟運より運ばれた紅花や米、各地の特産物が北前船に積まれ、日本海から瀬戸内海を廻って、大坂、さらには江戸に運ばれた。「西の堺、東の酒田」と呼ばれ、「酒田三十六人衆」でもある鎧屋（あぶみや）や本間家は大商人になった。特に本間家は戦前までは日本一の大地主としても知られており、『本間様には及びもせぬが、せめてなりたや殿様に』と呼ばれるほどの財力を誇った。最も権勢を誇った本間光丘は、日枝神社の創建や庄内砂丘に防砂林をつくるなど、今日の酒田の礎をつくった。

そんな酒田、市民はこぞって言う『港町らしさが感じられない』とー酒田港長期構想等での市民アンケート調査等でも顕著に港町としての意識が希薄になっているーそんな中で、親水空間をつくりだすことが『港町らしさ』取り戻すものと仮定し、このシンポジウムが開催されたのかもしれない。酒田市民が港町としてのアイデンティティを親水空間づくりに求めたのではないのだろうか。このシンポジウムで世界、全国の様々な事例や親水空間づくりの知見が発表された。酒田の事例と重なったことで、新しい親水空間づくりについてのアイデアが発掘されるであろう。しかし、見た目やハードではなく市民一人一人が港町の住民としての意識をもつ、そして、その意識の延長線上に、港町としての空間をつくることにつながっていくのではないだろうか。

特定非営利活動法人 極楽鳥海人
理事長 太田 薫

下にトドが寝そべっている写真が写っているんですが、よく見るとHドック・Iドック・Jドック・Kドックと書いてあります。それぞれの船のドックに番号が振られているんですけど、ここにカッコしてシーライオンって書いてあるんです。シーライオンの専用のバース(船が停泊する場所)なんですね。要するに人がそこで楽しむって事は、きちんと自然との折り合いもつけますよ、シーライオンが来て休む場所もちゃんと残してますよ、ということなんです。

フィッシャーマンズワーフは当然人が食事出来るように整備されているのですが、そのすぐ横でシーライオンが寝そべっていて、例えばシーフードを食べた殻をポイと投げると、シーライオンが食べてまた休みに行く、というような光景があるんですね。

ですからこのような欧米型のウォーターフロント開発というのは、まさに典型的な親水空間の整備の仕方なんですけど、実はそれをそのまま形だけ日本に持ってきて真似てみても、日本は船の文化が無いのでアメリカのような港の賑わいが生まれにくいという問題があります。

波の当たり具合で音階を調律した音が出る護岸がクロアチアにあります。⁴ これをやはり宮城県議会議員の方が、クロアチアで見たものを地元にも、ということで作らせたいらしいのですが、ハードだけ見ても本当にそれがその場所に合うものなのかとか、文化的に受け入れられるものなのかというのをよくよく考えていかないと、よくわからないものになってしまいますねという事例です。




酒田の海と水路がおりなす親水空間づくり

- 酒田の様々な歴史、文化、自然、なりわいを活かして
- 酒田の未来像、目標像をみんなで共有しよう
 > みんな同じでなくていい、ちょっとずつ違っていい
- 共有するための場、ネットワークをつくろう
 > 意見を交わさなくていい、話を聞くだけ・知るだけでもいい
- 次の世代につないでいこう
 > 人を育てなくていい、一緒に楽しみながら一緒に成長しよう


原田さんから、故郷の新田川の会のお話を頂きましたが、汚かった川を綺麗にする為に色々な事をされているお話を聞いていて、汚かった川が綺麗になった、でも水質も悪いからもうちょっと綺麗にしたいなというお話があったと思うのですが、では綺麗にするとはどういう事か。多分それは人によって色々考え方があり、例えば今一所懸命にやっておられるように、綺麗な花がたくさん咲いたり桜並木が復活したりということもあると思いますし、或いは実際に川に下りて生き物と触れ合えるような場所が欲しいという人もいれば、別にそんなのいらないからカヤックだけであればいいよって人もいるかも知れない。多分色々な考え方のグループなり人がいると思うので、じゃあ何がしたいのか、様々な人が何かをやっていそうだとすることは分かっているけど、実際具体的に何をやっているのか、何に困っているのかということは意外に共有できていないと思うんです。

⁵ ですから、みんな一緒にやりましょうという言葉だけではなくて、出来る所から一緒に手伝いながら、或いは情報共有しながらやってみましょうと、その程度で始めればそんなに辛いのではないかと。例えば子供を連れてきて自分が楽しみながら何かやっていると、それを見て大人が楽しそうなことやってるなと思ってくれる子供も、そんなに多くはないですが100人に1人・2人でもいれば充分なんじゃないかという事は、アマモの活動なんかをしても感じます。あまり無理をせず和気藹々と楽しみながらやっていくことが結果として次の世代へ繋がっていくんじゃないのかなと感じています。

 岩井 克巳 様

今回酒田を訪れるのは3回目です。1度目は、地元のシーカヤッカーたちが毎年企画実施している「酒田飛島カヤック横断」。2度目は、夏に行われた「酒田みなと一周ツーリング」への参加。そして、今回の酒田水辺のシンポジウムです。普段私は、神奈川県横浜をシーカヤックにて水辺から案内し、また「水辺」を切り口に全国各地を訪問し取材するという活動を行っています。全国の水辺を巡り漕ぐ中で、この酒田という街中の水辺は非常に利用しやすいということが明らかになりました。その理由は、次の2つの利点があるからだと思っています。1つは、酒田港(本港と北港)へとその河口で各々繋がる新井田川水系が穏やかに街の中を流れ、また街から水辺へと双方向でアクセスしやすい護岸になっていること。これがシーカヤックやSUP(スタンドアップパドルボード)を持って水面へと降りたくなり、そして水面を散策したくなる欲求へ誘います。その水辺を利用するに当たり、酒田港に関連する公的機関(国交省、山形県、酒田市、海上保安庁)が、港の利用にあたり同一の方向性を示しているということがもう1つの利点です。役場の機能は各部署にて縦割りであり、特に港湾と河川という1つの流域の中に存在する水辺でいうとその障壁は二重三重となり、水辺利用を検討する市民の前に立ち塞がるのです。

しかし、この酒田は関連する公的機関が「港の賑わい」という名の元に同一の方向性を持ち、その障壁を取り除き減らすことに大きく躍進しています。このことが、私のような旅人にも親しみやすく居心地がよい水辺を創っているのでしょうか。複数で乗り合う船舶でも水辺は楽しめるのですが、シーカヤックやSUPは基本的に1人乗り。この1人で水面というアウトドアへ出て還って来るという行為の中で、より水辺目線から街を臨み新たに生み出される市民権というものが確立されるのではないかと日々考えています。多くの市民や他所からの旅人までもがいつでも参画できるような多様性ある水辺へと展開していくことが、酒田復権の序章なのではないでしょうか。

 糸井 孔帥 様

私は大阪でアマモ場再生活動を中心に、体験型の環境学習・教育を行っています。大阪は、古くから「北前船」を介して酒田との交流が頻繁に行われていた町で、同じように縦横に水路が巡らされており、そういう面でも親近感があります。

酒田には、1年ほど前より、鳥海山・飛島ジオパーク構想のお手伝いをさせていただいている関係で度々訪れています。水の循環をテーマにしたジオパーク構想は、水都「酒田」に象徴されるものだと思います。

大阪での私たちの活動は、「できる事からやっぺいこう!」を合い言葉に行っています。もともと、大阪から和歌山の海へ出かけて潜っていたダイバーたちが、「地元の海を素通りしてどないすんねん!」、「大阪湾でも潜れるようにしたい」、「我々でも大阪湾のためになることが何か出来るんちゃうんか?」との想いで、活動を始めました。ちょっとだけ背伸びはしますが、無理をせず他の団体の方たちに助けていただきながら活動を行っています。大阪湾には、沿岸域で活動している団体や行政、大阪湾のために何かしたいと思っている個人や専門家がネットワーク上でつながっている「大阪湾見守りネット」という団体があります。このネットワークがそれぞれを繋ぐことによって、不足を補い合う関係が構築されています。私たちも“ちょっとだけの背伸び”で活動を行えているのは、この様な仕組みが有るからです。

今回のシンポジウムでみなさんのお話を伺って、酒田にも人と人とを繋ぐ同じような土壌が有るのだと感じました。誰かが無理をするのではなく、それぞれの立場の方たちがそれぞれでできる事を集結すれば、みなさんも様々なことが実現できるのではないのでしょうか。



NPO法人

元気王国

Sports Community